

# 平成 26 年度新農薬実用化試験で注目された 病害虫防除薬剤

一般社団法人日本植物防疫協会 調査企画部 はやし なおと ほうじょう ひろし  
林 直人・北條 広

平成 26 年度の新農薬実用化試験については、10 月 16 日の茶分野を皮切りに 12 月 22 日の家庭園芸分野まで、分野ごとに 15 の成績検討会を開催し、依頼された薬剤の各種病害虫に対する効果・薬害、使用方法の検討を行った。

ここでは、平成 26 年度試験の概要ならびに、注目された薬剤等について紹介する。

なお、本稿で「新規化合物」と記載しているのは、平成 26 年 1 月に試験を依頼された時点で未登録の有効成分であることを示す。

## I 新農薬実用化試験の概要

### 〔殺菌剤〕

本年度依頼された試験薬剤は 255 剤であった（生物農薬を含む）。これら薬剤についてそれぞれ複数の作物、病害に対して延べ 2,443 件の試験が実施された。成分が新規化合物単剤もしくは新規化合物同士の混合剤である製剤は 25 剤（9.8%）、新規化合物と既知化合物の混合剤は 15 剤（5.9%）であった（図-1）。

試験分野別に見ると、稲・麦関係では、昨年に比べ試験数は増加した。水稻の病害別では例年、依頼の多いもち病が最も多く、もみ枯細菌病の試験も多かった。昨年と比較して内穎褐変病・稲こうじ病の依頼が増加した。その他病害は前年と同程度であった。麦関係では雪腐病・赤かび病の試験数が多かった。赤さび病、葉枯症の試験も増加した。本年度初めて依頼された新規化合物を含む製剤は 2 剤で、1 剤は育苗箱施用の粒剤、もう 1 剤は育苗箱施用と湛水散布の粒剤であった。稲病害の試験では、抵抗性誘導剤の試験数が 4 割を占めた。

野菜関係についても、昨年に比べ試験数が増加した。本年度初めて依頼された新規化合物を含む製剤は 1 剤で、野菜類の灰色かび病を中心に試験が行われた。病害別では、昨年多かったキャベツ菌核病、トマトうどんこ病の試験が本年度も多かった。前年と比較して、トマト灰色かび病・すすかび病、イチゴ灰色かび病、タマネギ

灰色腐敗病の試験数が増加した。

果樹関係では、落葉果樹・常緑果樹の試験数が前年度と同程度であったが、寒冷地果樹の試験数は昨年より減少した。本年度初めて依頼された新規化合物は落葉果樹、寒冷地果樹で 3 剤、常緑果樹で 1 剤であった。病害別では、落葉果樹でなし黒星病、もも灰星病、ぶどう灰色かび病の試験が多く、昨年多かったなしうどんこ病・輪紋病の試験は減少した。常緑果樹ではかんきつかいよう病・灰色かび病の試験が多く、昨年多かったかんきつそうか病の試験が減少した。寒冷地果樹では、りんごうどんこ病・褐斑病・黒点病の試験が多く、昨年多かった炭疽病は減少した。

野菜・果樹関係では、ここ数年依頼が増加しているコハク酸脱水素酵素阻害剤（SDHI）の試験が多く、混合剤を含め野菜、果樹病害の試験数の 4 割がこのグループの薬剤であった。

茶分野では試験薬剤 10 剤で試験数は昨年度に比較して増加した。本年度初めて依頼された新規化合物は 1 剤であった。病害別では炭疽病の試験が最も多かった。

芝草分野では試験薬剤 32 剤で試験数は昨年度に比較して減少した。

生物農薬は試験薬剤数 10 剤で試験数は昨年度に比較してやや減少した。稲病害の試験はなく約 4 割が野菜の細菌病を対象とした試験であった。

### 〔殺虫剤〕

本年度依頼された薬剤数は 275 剤で、それぞれ複数の作物・害虫に対して延べ 3,496 件の試験が実施された。

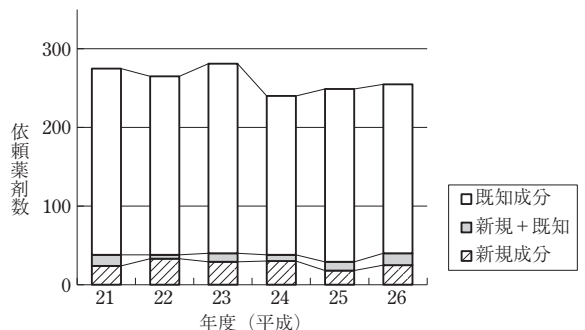


図-1 殺菌剤効果試験依頼薬剤数の推移

The Remarked Pesticides for the Efficacy Study in Japan (2014).  
By Naoto HAYASHI and Hiroshi HOUJYOU

(キーワード：殺虫剤，殺菌剤，JPPA，新農薬実用化試験，平成 26 年度)